

がら良き名前持つ

久保富紀子

・秋深く竹切るに良き時なりと竹鋸持ちて
山へ山へと

河野 聖子

・候補者の両陣営の集会のどちらの画にも
映っている月

佐久間得幸

高鸞石作、北国の冬の風物が、やや翳り
を帯びて描かれる。三首目の「やわらかき
焰」の感覚的な表現、五首目の暗い油絵の

ような一場面、六首目の冷えたパターの質
感など、独特な作品世界がある。久保富紀

子作、「君」が接写した写真の中に植物の
命そのものを見ている。一首目の下句から

は花たちの小さな囁きが聞こえるようだ。

撮影中の「君」の姿を想像する歌にもあた

たかい心寄せがある。河野聖子作、竹林に
竹を切りに行き、竹細工を編むまでの工程

をいきいきとうたう。その肉体の動きとシ
ンクロするように、どの歌もリズムミカル。

佐久間得幸作、四首目はテレビ映像だろう。

意外な場面を通して、どこからでもひとつ
の月が見えることをうたって新鮮。六首目
の骨と月の白さにもはっとさせられた。

・ゆさゆさと青いダンブが遠ざかる温泉街
をはみ出しそうに

青山 哲也

・この町の景色となりしクレーンの四基の
灯り星と交わる

遠藤 彰

・投げやりな人間のごと横たわる掛布をど
けて我を横にす

神戸 貴雅

・萩の花ほろほろ咲けり 突然にどんと深
まる秋の野を行く

佐久間幸子

・鉛筆に肥後守当てサクサクと削れば戻る
指の感触

高西 芳弥

・ようやくに一つ終わればまたさがる松明
のごと灯る点滴

中川 弘子

・音がして目を覚ましたり音がする夢から
覚めたような気もする

長沼 通郎

・二泊三日の修学旅行から帰宅して食事中
も吾を触る吾子

吉本万登賀

短歌を媒介に 墨石剛仁

先月初めより、国民文化祭で郡上、歌人
クラブのブロック大会で長野県岡谷と高
知、歌人クラブの幹事有志と富山へ。また、
昭島と北池袋の図書館で短歌講座と、各地
で短歌を媒介に様々な方々と交流できた。
さて、今月も特選の方々から。

七十七歳にして受けた手術をドキュメン
タリータッチで詠んだ、小林優子作。力強
い文体が印象に残る。へ思いのほか小さく
見える手術台いぶかしみつつせり上げる身
は。

金有美作は、本の実がなる木に出逢うた
め森に入ってゆくといい連作。へ絵本から
古文書までを実らせて宇宙を抱き枝はひろ
がる。

金作とは対照的に、庭にあつて身近な存
在だった柿の木を歌った林田美紀作も心に
沁みた。へ次郎柿の名を持ちながら渋柿で
辛くあつた日もありました。

口笛浦作は、温かな視線で小学校の運動
会を観ている。へ大玉は子どもらの上弾み
ゆく支えるその手はどれも愛おし。

次に、準特選扱いとした二作から。

・情報の過剰は思考を止めるから削ぎ落と
すほど近づく事実

アダムス理恵

・三面の鏡に映る分身も苦戦している五番
ポジション

門田 祥子

以下、特選、準特選以外の方々の注目作
を引く。

・離れても繋がっていたオポチュニティ彼